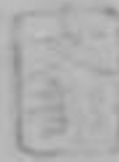


十三年十二月二十八日

第五拾九號

明治十二年^{九月}第四拾號布告教育令左、通改正候条此



第一條 全國、教育事務、文部卿之ヲ統攝ス故ニ學校幼稚園書籍館等、公立私立、別ナク皆文部卿、監督内ニアルヘシ

第二條 學校、小學校中學校大學校師範學校專門學校農學校商業學校職工學校其他各種、學校トス

第三條 小學校、普通、教育ヲ兒童ニ授クル所ニシテ其學科ヲ修身讀書習字美術地理歴史等、初步トス土地ノ情況ニ隨ヒテ罪畫唱歌體操等ヲ加ヘ又物

理生理博物等、大意ヲ加フ殊ニ女子ノ爲ニハ裁縫等ノ科ヲ設クヘシ

但已ムヲ得サル場合ニ於テハ修身讀書習字美術地理歴史ノ中地理歴史ヲ減スルコトヲ得

第四條 中學校ハ高等ナル普通學科ヲ授クル所トス

第五條 大學校ハ法學理學醫學文學等ノ專門諸科ヲ授クル所トス

第六條 師範學校ハ教員ヲ養成スル所トス

第七條 專門學校ハ專門一科ノ學術ヲ授クル所トス
農學校ハ農耕ノ學業ヲ授クル所トス

第八條 商業學校ハ商賣ノ學業ヲ授クル所トス
職工學校ハ百工ノ職藝ヲ授クル所トス

以上數條掲クル所何ノ學校ヲ論セス各人皆之ヲ設

置スルヲ得ヘシ

第九條 各町村ハ府知事縣令ノ指示ニ從ヒ獨立或ハ聯合シテ其學齡兒童ヲ教育スルニ足ルヘキ一箇若クハ數個ノ小學校ヲ設置スヘシ

但本文小學校ニ代ルヘキ私立小學校アリテ府知事縣令ノ認可ヲ經タルトキハ別ニ設置セサルモ妨ケナシ

第十條 各町村ハ學務ヲ幹理セシメンカ爲ニ小學校ヲ設置スル獨立或ハ聯合ノ區域ニ學務委員ヲ置キ戸長ヲ以テ其負ニ加フヘシ

但人負ノ多寡給料ノ有無及其額ハ區町村會之ヲ評決シ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第十一條 學務委員ハ町村人民其定員ノ二倍若クハ

二 改正獎勵

三倍ヲ薦舉シ府知事縣令其中ニ就テ之ヲ撰任ス
ヘシ

但薦舉ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部
卿ノ認可ヲ經ヘシ

第十二條 學務委員ハ府知事縣令ノ監督ニ屬シ兒童
ノ就學學校ノ設置保護等ノ事ヲ掌ルヘシ

第十三條 凡兒童六年ヨリ十四年ニ至ル八箇年ヲ以
テ學齡トス

第十四條 學齡兒童ヲ就學セシムルハ父母後見人等
ノ責任タルヘシ

第十五條 父母後見人等ハ其學齡兒童ノ小學科三箇
年ノ課程ヲ卒業サル間已ムヲ得サル事故アルニテ
ラサレハ少クトモ毎年十六週日以上就學セシメサ

ルヘカラス又小學科三箇年ノ課程ヲ卒業タル後
ト雖モ相當ノ理由アルニテラサレハ毎年就學セ
シメサルヘカラス

但就學督責ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ
文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第十六條 小學校ノ學期ハ三箇年以上八箇年以下
ルヘク授業日數ハ毎年三十二週日以上タルヘシ
但授業時間ハ一日三時ヨリ少カラス六時ヨリ多
カラサルモノトス

第十七條 學齡兒童ヲ學校ニ入レス又巡回授業ニ依
ラスシテ別ニ普通教育ヲ授ゲントスルモノハ郡區
長ノ認可ヲ經ヘシ

但郡區長ハ兒童ノ學業ヲ其町村ノ小學校ニ於テ

大正類典
試験セシムヘシ

第十八條 小學校ノ設置スルノ資力ニ乏シクシテ巡回授業ノ方法ヲ設ケ普通教育ヲ兒童ニ授ケントスル町村ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第十九條 學校ニ公立私立ノ別アリ地方税若クハ町村ノ公費ヲ以テ設置セラルモノヲ公立學校トシ一人若クハ數人ノ私費ヲ以テ設置セラルモノヲ私立學校トス

第二十條 公立學校幼稚園書籍館等ノ設置廢止其府縣立ニ係ルモノハ文部卿ノ認可ヲ經ハク其町村立ニ係ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第二十一條 私立學校幼稚園書籍館等ノ設置ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ハク其廢止ハ府知事縣令ニ開申

スヘシ

但公立小學校ノ代用スル私立小學校ノ廢止ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第二十二條 町村立私立學校幼稚園書籍館等設置廢止ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第二十三條 小學校ノ教則ハ文部卿頒布スル所ノ綱領ニ基キ府知事縣令土地ノ情况ヲ量リテ之ヲ編制シ文部卿ノ認可ヲ經テ管内ニ施行スヘシ

但府知事縣令施行スル所ノ教則ニ準據シ難キ場合アリテ之ヲ斟酌増減セントシ府知事縣令之ヲ許可セントスルトキハ其意見ヲ付シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

女子學校ノ設置
又別に認可可シ

第二十四條 公立學校ノ費用府縣會ノ議定ニ係レル
モノハ地方税ヨリ支辨ニ町村人民ノ協議ニ係レル
モノハ町村費ヨリ支辨スヘシ

第二十五條 町村費ヲ以テ設置保護スル學校ニ於テ
補助ヲ地方税ニ要スルトキハ府縣會ノ議定ヲ經テ
之ヲ施行スルコトヲ得ヘシ

第二十六條 公立學校ノ敷地ハ免税タルヘシ

第二十七條 凡學事ニ供スル寄附金等ハ其寄附人ヨ
リ指定セシ目途ノ外ニ支消スルコトヲ得ス

第二十八條 削除

第二十九條 削除

第三十條 削除

第三十一條 削除

第三十二條 削除

第三十三條 各府縣ハ小學校教員ヲ養成センカ爲ニ
師範學校ヲ設置スヘシ

第三十四條 公立師範學校ニ於テハ本校卒業ノ生徒
ニ試験ノ後卒業證書ヲ與フヘシ

第三十五條 公立師範學校ハ本校ニ入學セサルモノ
ト雖モ卒業證書ヲ請フモノアラハ其學業ヲ試験シ
合格ノモノニハ卒業證書ヲ與フヘシ

第三十六條 削除

第三十七條 教員ハ男女ノ別ナク年齢十八年以上ヲ
ルヘシ

但品行不正ナルモノハ教員タルコトヲ得ス

第三十八條 小學校教員ハ官立公立師範學校ノ卒業

證書ヲ有スルモノトス

但本文師範學校ノ卒業證書ヲ有セスト雖モ府知事縣令ヨリ教員免許狀ヲ得タルモノハ其府縣ニ於テ教員タルモ妨ケテシ

第三十九條 文部卿ハ時々吏員ヲ府縣ニ發遣シ學事ノ實況ヲ巡視セシムヘシ

第四十條 公私學校ニ於テハ文部卿ヨリ發遣セル吏員ノ巡視ヲ拒ムコトヲ得ス

第四十一條 府知事縣令ハ管内學事ノ實狀ヲ記載シテ毎年文部卿ニ申報スヘシ

第四十二條 凡學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルコトヲ得ス

但小學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルモ妨ケナ

千九百零二年

第四十三條 凡學校ニ於テ授業料ヲ收ムルト收メサルトハ其便宜ニ任スヘシ

第四十四條 凡兒童ハ種痘或ハ天然痘ヲ歴タルモノニアラサレハ入學スルコトヲ得ス

第四十五條 傳染病ニ罹ルモノハ學校ニ出入スルコトヲ得ス

第四十六條 凡學校ニ於テハ生徒ニ體罰破テ或ハ過スルノ類ヲ加フヘカラス

第四十七條 生徒試験ノトキハ父母或ハ後見人等其學校ニ來觀スルコトヲ得ヘシ

第四十八條 町村立學校ノ教員ハ學務委員ノ申請ニ因リ府知事縣令之ヲ任免スヘシ

文部省上申
文部省上申

文部省上申

第四十九條 町村立小學校教員ノ俸額ハ府知事縣令
之ノ規定シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ
第五十條 各府縣ハ土地ノ情况ニ隨ヒ中學校ヲ設置
シ又專門學校農學校商業學校職工學校等ヲ設置ス
ヘシ

文部省上申
十三年十二月九日

別冊教育令改正案並ニ其上奏之議共進呈候間奏上
被成下度候右ハ昨日モ畧陳述候通施政上至急ヲ要
シ候モノニ付御裁可相成候ハ、本月二十二三日頃
迄ニ布告相成候様致シ度將又本案ノ旨趣ニ關シ内
閣各部ニ於テ御質疑ノ廉モ御座候ハ、辨明之儀文
部權大書記官嶋田三郎同少書記官久保田讓ニ申付
置候ニ付両官ヘ向テ詳議相成度且本案御採用之上
元老院議定ニ被附候節ハ右兩書記官ヲ以テ内閣委
員ニ被命候様相成候ハ、幸ノ事ニ有之候此段及上
申候也
二月九日

教育令改正案ヲ上奏スルノ議

維新僱武ノ後政府大ニ文教ヲ興シ越ニ明治五年泰

西ノ法度ヲ折衷シ新タニ學制ヲ布ケリ其事草創ニ
 屬スルヲ以テ尨雜敘無ク事態ニ齟齬スルモノナキ
 ニアラズト雖モ學校ノ設置天下ニ遍ル人民就學ノ
 途爰ニ洞開セシモノハ一ニ此法ノ致ス所ニアラス
 ニハアラス示未五七年世態大ニ改マリ百般ノ則度又
 隨テ變スルヲ以テ學制漸ク其權衡ヲ失セリ是レ明
 治十二年九月四十七條ノ新法ヲ定メ以テ旧學制ニ
 代ル所以ナリ蓋シ此改正ニ當リ旧法ノ尨雜ヲ芟リ
 過度ノ制限ヲ除クニ急ナルヨリ其勢ノ及フ所徃々
 放任ス可ラサルモノヲ俟セテ放任スルニ至レリ其
 然ル所以ノ故ヲ考フルニ亦偶然ニアラサルナリ夫
 レ學制ノ頒布ニ當リ執事者意ヲ成功ニ銳クシ校舍
 ノ壯大ニシ外觀ヲ裝飾スルノ事徃々ニシテ免レス

是ニ於テカ學問ノ益未タ顯ハレスミテ人民之ヲ厭
 フノ念先ツ生ス議者其弊ノ因ル所ヲ深考セス徒ラ
 ニ罪ヲ學事ノ干涉ニ歸シテ之ヲ允ム而シテ教育令
 此際ニ成レルヲ以テ爲メニ其精神ヲ謬マルモノ蓋
 シ寡シトセス臣ヲ以テ觀ルニ前日ノ弊タル學制ノ
 主義ニアラスミテ施行ノ宜キヲ失フニアリ干涉ノ
 過度ニアラスミテ干涉ノ途轍ヲ過ツニヨレリ何ニ
 トナレハ前日ノ干涉スル所ハ唯學校ノ設立費用ノ
 募集等專ラ外部ノ事ニ止マリ校業ノ得失ヲ考ヘ費
 途ノ緩急ヲ察スルカ如キ内部ノ事ニ至テハ其意ヲ
 經ル蓋シ寡ケレハナリ而シテ議者一切尤ラ干涉則
 度ノ上ニ歸シ反動ノ勢普通教育ト雖モ亦干涉ス可
 ラスト云フニ至ル過テリト謂フヘシ猶ホ醫師ノ治

ヲ過ツハ醫術ノ咎メニアラス而シテ醫ノ不良ナル
カ爲ニ遂ニ醫術ヲ廢セントスルカ如シ豈理ナラン
ヤ蓋シ普通教育ハ國民ノ品位ヲ上下スルノカアリ
苟モ國ヲシテ開明民ヲミテ良且慧ナラシメントス
ルハ教育ノ普及ニアラサレハ不可ナリ而シテ政府
之ヲ督勵セスミテ其普及ヲ望ム殆ト河清ノ蟄ツ可
ラサルカ如シ夫ノ英國ノ如キ之ヲ歐洲大陸諸國ニ
比スレハ頗ル教育ヲ放任スルモノトス而シ全國人
民ノ無智ナル風ニ識者ノ慨ク所トナリ世論漸ク干
渉ノ已ム可ラサルヲ覺知シ遂ニ一千八百三十九年
ニ及テ樞密院中ニ教育局ヲ設ケ若干ノ費用ヲ議定
セシヨリ年々其權限ヲ擴充シ費額ヲ増益シ一千八
百七十八年ノ如キハ補助金貳百拾四萬九千貳百〇

ハ「ホント」ノ巨額ヲ議院ニ於テ議定スルニ至レリ夫
ノ政治ニ干渉ヲ事トセス又教育ノ一事ニ至テハ歐
洲大陸ノ諸國ニ數等ヲ讓レルノ英國ニシテ其措置
尚ホ此ノ如シ其他ハ類推スヘキナリ蓋シ其政体ノ
如何ニ關セス苟モ文明ヲ以テ稱セラル、國ニシテ
普通教育ノ干渉ヲ以テ政府ノ務メトセサルハナシ
是レ豈普通教育ハ其國運ニ關スル最大ナルカ故ニ
アラスヤ我國ノ如キ學政ヲ施シテヨリ纔ニ數年未
タ其効績ヲ見サルニ於テハ深ク怪ムニ足ラス但其
施行ノ間ニ當リ僅々ノ弊ヲ見ルカ爲メニ其精神ヲ
擁シ又皮相論者ノ說ニ謬ラレテ此主儀ヲ操ムルニ
至テハ何レノ日ニカ此民ト共ニ文明ノ域ニ進ム
ヲ得ニヤ是レ臣カ今日ニ當リ教育ノ主義ヲ定メシ

ヲ希圖シテ已マス教育令ノ改正案ヲ進奏スル所以
ナリ或ハ曰ニ客年教育令ヲ判定シテ墨痕未タ乾カ
ス今又之ヲ改正セハ信ヲ國民ニ失フヲ如何セント
是レ亦事ヲ解セサルノ言ノミ苟モ法令ノ國家人民
ニ不利ナルヲ知ラハ隨テ之ヲ改正スル又何ノ憚ル
所カ是レアラニヤ若シ既ニ其不利ナルヲ覺ルモ敢
テ之ヲ改メス荏苒年ヲ涉ル者ハ彼ノ不可ナルヲ知
テ難ヲ攘ミ來年ヲ俟テ止メントスル者ト其意果シ
テ何クニアルヤ抑亦自家ノ便ヲ計ルニ厚フシテ國
家ヲ念フニ薄キ者ト謂ハサル可ラス是レ臣力今日
改正案ヲ進奏スルニ於テ敢テ遲疑セサル所以ナリ
抑現行教育令ノ高等諸學校ニ於ケル變力ニ其名稱
ヲ掲クルニ止マリ之カ判規ヲ立ルノ條ハ全ク缺如

臣ノ意將ニ之ヲ

タリ補テ其體ヲ具ヘシメントスルニ在リ但普通
教育ノ衰頹ヲ挽回スルヲ焦眉ノ急ニ屬スルヲ以テ
今回ノ改正ハ專ラ小學ニ係ルノ事ヲ主トシテ其他
ニ及ハス謹テ此ニ本案ヲ進ムルニ當リ此事由ヲ一
言シテ以テ豫ノ他日改正ノ端緒ニ供ス伏シテ請フ
陛下ノ此ニ照察セシマラ臣敬謹恐惶頓首謹言
布告案

第 号

明治十二年九月第四十号布告教育令左ノ通改正追加
候條此旨布告候事

年号年月日

改正案

第二條 學校ハ小學校中學校大學校師範學校專門學校職工

以下理由書ハ墨書ス

地理學

學校其他各種ノ學校トス

理由 學術ノ生産力ニ關スルヤ大ナリト雖モ直接ニ其力ヲ現シ又廣ク社會ニ實業ヲ起サシメ専門學校ニ並ニテ學校類中ノ要部ヲ占ムルモノハ職工學校ヲ以テ最ナリトス而シテ教育令中此名稱ナキハ頗ル關與ニ屬ス是レ本條改正ノ要旨ナリ

第三條 小學校ハ普通ノ教育ヲ兒童ニ授クル所ニ

シテ其學科ヲ讀書習字算術地理歴史修身等ノ初歩トス土地ノ情況ニ隨ヒテ對畫唱歌體操等ヲ加ヘ又物理生理博物等ノ大意ヲ加フ殊ニ女子ノ爲ニハ裁縫等ノ科ヲ設クヘシ但已ムヲ得サル場合ニ於テハ讀書習字算術地

墨書

理歴史修身ノ中地理歴史ヲ裁スルコトヲ得

理由 現行ノ令ニ於テハ讀書習字算術地理歴史修身ノ六科ヲ以テ小學必須ノ學科トス其一ヲ缺ケハ則チ小學ニアラサルナリ普通教育ニアラサルナリ夫レ地理ヲ講シテ本邦ノ形勢ト其萬國ニ對スル關係トヲ辨シ歴史ヲ學ビテ國家ノ沿革ト人事ノ變遷トヲ考フルハ人トナリテ社會ノ員ニ列スル者ノ知ラサル可カラサル緊要ノ事ナリト雖モ之ヲ修身ノ彙倫ヲ明ニシ及ヒ讀書習字算術ノ用ノ言語ニ齊フスル者ニ比スレハ其緩急固コリ遠庭アリ而シテ學齡ハ年間此等六科ノ學ヲ修ムレハ其習熟ノ觀ルヘキモノ無キニアラスト由モ地ニ都鄙ノ別アリ

地理學

人ニ貧富ノ異アリ且今日人民ノ生計社會ノ程度ヲ熟視スルニ全國ノ児童ヲ舉ケテ盡ク八年ノ就學ヲ畢ラシメントスルハ勢必ス行ハルヘカラサルナリ唯八年就學ノ行ハルヘカラサルノミナラス更ニ之ヲ短縮シテ六年トスルモ亦未タ必スシモ能ハサルナリ且其就學ノ期愈々縮マレハ其諸科ヲ修ムルヤ愈々難シトス故ニ其六科ヲ併セ授ケテ以テ共ニ習熟セサランヨリハ寧ロ其一ニヲ減シテ以テ專ラ習フ所ニ熟セシムルノ實用ニ適スルニ如カサルナリ是レ此改正案ニ但書ヲ加ヘ地理歴史ニ科ノ如キハ事情ニ隨テ或ハ修メ或ハ修メサルヲ得セシメ以テ學期ニ長短アルノ條ト相照シテ以テ其宜

キヲ得セシムル所以ナリ

第八條 職工學校ハ諸般ノ工藝ヲ授ケル所トス

以上數條掲ケル所何ノ學校ヲ論セス各人皆之ヲ設置スルコトヲ得ヘシ

本條改正ノ理由ハ第二條ノ下ニ掲ケルヲ以テ更ニ此ニ贅セス

第九條 各町村ハ府知事縣令ノ指示ニ從ヒ獨立或

ハ聯合シテ其學齡児童ヲ教育スルニ足ルヘキ一箇若クハ數箇ノ小學校ヲ設置スヘシ

但本文小學校ニ代ルヘキ私立小學校アリテ府知事縣令ノ認可ヲ經タルトキハ別ニ設置セサルモ妨ケナシ

理由 現行ノ令ニ於テハ町村ヲミテ公立小學

校ヲ建設スルノ義務ヲ負ハシムルニ止リ而シ
テ之ヲ設クルノ制限ニ至リテハ則チアルヲ無
シ是レニ由リテ生スルノ弊一ニシテ足ラス蓋
寒鄉僻陬人口疎少ノ地ニシテ每村毎町必ス學
校ヲ設クルトキハ費用給セス校舍整ハス授業
ヲス合格ノ教員聘スル能ハス適當ノ器具備
フル能ハス之カ爲メニ児童ノ心性ヲ傷ヒ健康
ヲ害スル等ノ弊枚舉スルニ遑アラヌ此ノ如キ
ハ則チ其町村既ニ學校ヲ設置スルノ名義アル
ヲ以テ其負ヲ所ノ義務ヲ盡セルカ如ク見ユル
ト難ニ其實効ヲ考フルトキハ猶之ヲ設ケサル
ト異ナルナキナリ又其數町或ハ數村聯合ニテ
設立スル者ニ於テ之カ適當ノ制限ナキヲ以テ

三四里若クハ五六里ノ間僅ニ一校ヲ設立スル
アリ或ハ未タ甚タ廣遠ナラサルモ山河ノ阻
スルモノヲ併セラ一學校區ヲ立ツルアリ是レ
皆學齡児童ノ通學ニ耐フル能ハサル所ナリ或
ハ人口稠密ニシテ生計ノ度甚タ低カラサルモ
其人民未タ學業ノ利ヲ曉ラサルカ故ニ學校ノ
爲メニ資財ヲ出スヲ好マス纔ニ狹隘ノ校舍ヲ
起シテ以テ其義務ヲ免ル、ノ口實ト爲シ而シ
テ其學舍狹隘ナルヲ以テ學齡児童ヲ容ル、ニ
足ラズ其レヲシテ多ク不學ニ終ラシムルアリ
是レ皆學校設置ニ制限ナキノ致ス所ニアラス
ニハアラサルナリ而シテ其弊猶未タ此ニ止ラ
サル者アリ夫レ學制頒布以來數町村カヲ併セ

テ學校ヲ設立シ其規模畧觀ルヘキ者往々之レ
アリト雖モ去歲教育令發行ニ至リ學校分合ノ
事ヲ舉ゲテ之ヲ町村ニ屬シテヨリ其學校敷地
ノ屬スル町村外ノ者ハ之ヲ視ルヲ自己町村ニ
關セサル者ノ如ク校費ヲ出サス兒童ヲ遣ラス
ニテ連リニ分離ヲ主張スル者アリ甚キハ曩キ
ニ協議上ヨリ積ミ立テタル資金ヲ分割シテ各
自ニ學校ヲ設立セントスル者アリ而シテ其弊
ノ窮極スル所遂ニ合資ヲ以テ設立セル整備ノ
學校ヲ毀テ各自微カノ學校ヲ創起シ其費用
ハ前日ニ倍シ而シテ却リテ學事ヲミテ振ハサ
ルニ終ラシム是レ等ノ如キモ現今ノ令ニ於テ
ハ之ヲ禁スル能ハサルナリ是レ今固ノ改正ニ

於テ兒童ヲ教育スルニ足ルヘキ云々ノ字句ヲ
加ヘテ其設立ノ目的ヲ明ニシ又其制限アルノ
精神ヲ明示シ府知事縣令ノ指示云々ノ文字ノ
加ヘテ其果シテ兒童ヲ教育スルニ足ルヤ否ヤ
ヲ監スルノ權ヲ府知事縣令ニ付シ以テ妄リニ
分合スルノ弊ヲ制セントス其但書ニ於テ本文
小學校ニ代ルヘキノ文字ヲ以テ公益タルヘキ
ノ句ニ換フルモノハ蓋ニ公益ノ文字タル意義
稍不定ニ屬スルヲ以テナリ

第十條 各町村ハ學務ヲ幹理セシメニカ爲ニ小學
校ヲ設置スル獨立或ハ聯合ノ區域ニ學務委員ヲ
置キ戶長ヲ以テ其員ニ加フヘシ

但人員ノ多寡給料ノ有無及其額ハ區町村會之

ノ評決シ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ
理由 本條ノ改正案ニ三箇ノ要點アリ學務委
員ヲ設置スルノ地ヲ定ムル一ナリ戸長ヲ以テ
其員中ニ加フルニナリ區町村會ヲシテ委員ノ
數及ヒ其給料ヲ評決セシメ又府知事縣令ヲシ
テ之ヲ認可セシムルニナリ夫レ現行ノ令ニ於
テハ唯學務委員ヲ置クヘシト云フニ止マリテ
其之ヲ何レノ所ニ置クトニ言及ハス則チ學
校ヲ設置維持スルノ一區域ニ置クヘキ乎抑町
村ノ聯合シテ之ヲ設置維持スルモ猶毎町村ニ
置カサル可ラサル乎各地ニ於テハ之ヲ明知ス
ル能ハサルヲ以テ之カ説明ヲ請フモノ往々之
レアリ是レ改正文中小學校ヲ設置スル云々ノ

文字ヲ掲クル所以ナリ夫レ戸長ノ職タル町村
公共ノ事務ヲ統フルヲ以テ夫ノ衛生委員ノ如
キモ亦之ヲ助ケテ以テ其事ヲ行ヘリ然ルヲ學事ニ
於テハ獨リ學務委員專ラ之ヲ掌理スルトキハ
其施爲ノ力薄弱ナルノミナラス或ハ事務重複
ノ煩ヲ起シ或ハ彼此扞格ノ意ヲ生スルノ憂アリ
且ツ各地方ノ景況ヲ通觀スルニ大凡戸長ト
爲ル者ハ其町村ニ名望アル者又ハ村幹衆ニ超
ユル者又ハ旧家ニシテ鄉閭ニ尊重セラルル者
等ニシテ固ヨリ其町村人民ノ上流ニ居ル者ナ
ルカ故ニ其言自ラ行ハレ易キノ勢アリ故ニ之
ヲシテ學務委員ト共ニ事ニ從ハシメハ其學事
ニ裨益アル蓋シ細小ニアラサルナリ當是ノミナ

ラス區町村會起リテヨリ以來町村公共費ノ豫
算ヲ立テ、之ヲ議場ニ辨明スルハ則チ戸長ノ
主トシテ任スル所ナリ而シテ學校ノ費用亦其
一ニ居レリ蓋シ現行教育令第十條第十二條ニ
由レハ町村ノ學費ヲ議會ニ辨明スルハ學務委
員ノ務メタラサルヘカラス而シテ實際ニ於テ
ハ却リテ之ヲ戸長ノ爲ス所ニ歸セリ其事務ノ
相交渉シテ分離シ難キ既ニ此ノ如クニハ則チ
令中明文ヲ掲ケテ以テ其職務ヲ定メサル可ラ
ス是レ戸長ヲ以テ委員中ニ加フル所以ナリ抑
學務委員ノ職タル常ニ町村ノ學事ヲ幹理ス既
ニ此職アリ則チ其適當ノ給料十カル可ラス蓋
シ之アルヘクシテ而シテ之十キトキハ委員タ

ルモノ實ニ其職任ノ責ナキ者ノ如シ然ハ則チ
必ス之ヲ與フルトセニカ或ハ富豪有爲ノ人ニ
シテ此撰ニ當リ身公益ニ任スルノ榮譽ヲ悦ビ
給料ヲ受フルヲ屑トセサルアリ故ニ之ヲ與フ
ルト否サルトハ土地ノ情況及ヒ委員其人ノ地
位ニ由リテ之ヲ斟酌セサル可カラズ必ス之
カ一定ノ制度ヲ立テ、以テ之ヲ規スルヲ得ス
是レ其給料ヲ町村會ノ議ニ付スルヲ要スル所
以ナリ然リト雖ニ之ヲ與フヘクシテ而シテ與
ヘス送ニ委員ヲシテ無報ノ勞ニ服セシメ固リ
テ以テ學事ヲ振ハサルニ至ラシムルハ亦往々
見ル所ノ通弊ナリ故ニ專ラ之ヲ町村ニ委セス
必ス府知事縣令ノ認可ヲ經セシメテ以テ一方

ニ偏倚セサランヲ期ス是レ本條改正ノ大旨ナリ

第十一條 學務委員ハ町村人民其定員ノ二倍若クハ三倍ヲ薦擧シ府知事縣令其中ニ就テ之ヲ選任スヘシ

但薦擧ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

墨書

理由 現行ノ令ニ於テ學務委員ハ町村人民ノ撰擧タルヘシトアリ而シテ其撰擧セル者ハ直ニニ委員ト爲ルヲ得ル乎抑刊餘ノ人ノ如キ公共ノ信憑ヲ托スルノ性質ヲ缺クモノニ於テハ地方官法律ニ因リテ附與セラレタル監督ノ權(教育令第十二條)ニ因リテ之ヲ改換セシムルヲ

得ル乎或ハ一旦委員ト爲ルノ後ト雖モ其人職任ニ適セサルニ於テハ地方官之ヲ改撰セシムルヲ得ル乎是等ノ諸点皆令中ニ明掲セサルヲ以テ實施ノ際疑義ヲ生スル者ナキニアラス若シ撰擧セラル者ハ直ニニ委員トナリ如何ノ事由アルモ地方官之ヲ進退スルノ力ナシト解釋セハ則チ是ヨリ生スルノ弊竇ニ言フニ勝ヘサルモノアリ蓋シ町村學事ノ擧ルト否サルトハ學務委員其人ヲ得ルト否ラサルトニ由レリ何トナレハ児童ノ就學ヲ促シ學資ノ募集ヲ計リ學校ノ維持ヲカメ不就學ノ事故ヲ查スル等ハ地方官即區長ノ之ヲ管理スルアリト雖モ則其町村ニ任シ觀ク之カ事情ヲ識ルハ即チ學務

委員ノ深切ニシテ手ヲ下シ易キニ如カサレハ
ナリ然レタ人民未メ學問ノ利ヲ曉ラス劇場祭
禮ノ爲メニ千金ヲ捐ツルモ學校ノ爲メニ拾金
ヲ出スヲ悦ハス俳優力士ノ爲メニ款待ヲ盡ス
モ教員ノ爲メニ禮意ヲ表スルヲ厭フカ如キ未
タ普通學ノ人生ニ必需ナルヲ知ラス就學ハ社
會ノ公務タルヲ辨セサルノ地方ニ於テハ學務
委員其人ヲ得テ兒童就學ノ督促ニ遭ハント恐
レ勉メテ文筆ヲ解セス學事ヲ辨セサルノ人ヲ
擧ケ其キハ利餘ノ人ヲ撰ハントスル者アルニ
至ル故ニ其制限ヲ設ケ豈今日ニ已ムヲ得ンヤ
然リト雖モ委員ハ人民ノ委託ヲ受ケテ町村公
共ノ儀務ヲ代理スル者ナルヲ以テ人民ノ之ヲ

推薦スルヲ得ルハ實ニ町村自治ノ精神ニ出ツ
ル者ナレハ固ヨリ其疆界ヲ侵スヘキニ非ズ唯
府知事縣令ヲシテ其監督ノ權ヲ此際ニ實行セ
シメニア要ス然レタ其法タル推薦人ヲ得サル
ニ當リ之ヲ拒ミテ再撰セシムカ如キハ未タ其
宜キヲ得タリト云フ可カラス何トナレハ其事
タル唯被薦者ノ名譽ヲ毀テ薦者ノ煩ヲ重ヌル
ノミナラス其レヲシテ自ラ不快ノ念ヲ懷カシ
メ以テ官民爭離ノ端ヲ開クニ庶幾ケレハナリ
故ニ當初其員ノ二倍若クハ三倍ヲ推薦セシメ
其中ニ就キテ選任スルヲ得ルヲ改正案ノ如ク
ナシシメハ則チ一時ニシテ二回若クハ三回ノ
薦擧ヲ行フト其効ヲ同クセントス此グノ如キ

ニハ則チ官民共ニ偏重ノ弊無キヲ得ニ夫ノ爲
舉ノ制限ノ如キ倘文部省ニ於テ之ヲ定メ國中
ノ廣キ都鄙ノ隔タレルヲ省セス畫一ノ制度ヲ
以テ之ヲ規セントセハ或ハ事情ニ適セスシテ
扞格行ハレサルノ地ナキヲ保ツ可ラス故ニ府
知事縣令ヲシテ先ツ其案ヲ起草セシメ而シテ
後其區々ニ分岐シ東隅西陲之カ權衡ヲ失フナ
カラシメニカ爲メ且其事ノ重要ナルカ爲メニ
之ヲシテ文部卿ノ認可ヲ請ハシメントス是奉
條改正ヲ要旨ナリ

第十四條 學齡兒童ヲ就學セシムルハ父母後見人
ノ責任タルヘシ

第十五條 父母後見人等ハ其學齡兒童ノ小學校三

箇年ノ課程ヲ卒ラサル間已ムク得サル事故アル
ニアラサレハ少クトモ毎年十六週以上就學セ
シメサルヘカラス又小學校三箇年ノ課程ヲ卒リ
タル後ト雖モ相當ノ理由アルニアラサレハ毎年
就學セシメサルヘカラス

但就學督責ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ
文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

理由 現行ノ令ニ於テハ事故アリテ就學セシ
メサル者ハ其事由ヲ學務委員ニ陳述スヘシト
アリ而シテ其事故トハ如何ナルモノヲ指スヤ
一定ノ釋義ナク又行政規則ヲ以テ之ヲ定メシ
ムルヲ言ハス是レ兒童ノ就學ヲ以テ父母後
見人ニ負ハシムルノ義ト協ハサルナリ何ント

十レハ一方ニ於テハ法律上ノ責ヲ父母後見人ニ負課シ一方ニ於テハ其負課ヲ免ル、ト免レサルトノ要質ヲ定メサレハナリ況ンヤ其之ヲ學務委員ニ陳述スルニ止マルニ於テヤ且第十四條ニ於テハ十六ヶ月ヲ以テ児童就學ノ最短期トシ此期ヲ過クルキハ就學ノ責ナシトセリ夫レ児童六歳ニシテ小學ニ入り纔ニ一年四箇月ヲ經テ終ムル所ノ普通學ハ成丁ノ後ニ至リ果シテ其身ヲ益スルニ足ルヘキ乎假令改正案第三條ノ如ク地理歴史ノ二科ヲ除キ簡易ノ科ヲミテ終メシムルモ尚且其用ニ適セサルヲ知ルナリ既ニ其用ニ過セス安シ之ヲ以テ責ヲ免ル、ノ定限トスルヲ得ニヤ況ンヤ唯十六ヶ

月云々ト言フトキハ假令父母タル者財計餘アリ児童ヲシテ全備ノ小學ヲ終メシムルニ足ルト雖モ已レ學問ヲ悦ハサレハ則チ児童ノ就學十六ヶ月ヲ以テ我カ義務畢レリト爲シ直ニ之ヲシテ退學セシムルモ既ニ法律ノ之ヲ許スアレハ何ニ因リテ之ヲ拒止スルヲ得ニヤ而シテ児童ハ固ヨリ智慮鮮キカ故ニ遊戲百端唯其課業無キヲ悦ビ徒ラニ歲月ヲ涉リ其人ト成ルニ及ビ始メテ自ラ悔イ是ニ至リテ父母ヲ恨ムルモ亦何ノ益カアラニ哉一此ノ如キ場合ニ於テハ社會ノ集力即チ政府ナル者此等私人ノ利害ヲ推定シテ其間ニ干渉シ知者ノ權利ヲ保護スルハ勢ノ已ム可カラサルモノトス何トナ

レハ児童タル者未タ已レノ利害ヲ判別スルノ能力無ク而シテ父母又之ヲ賊フニ方リテハ則チ政府ヲ除クノ外又之ヲ擁護スル者アラサレハナリ蓋シ^{法律}護眼ノ如者ヲ見ルヤ成丁ノ人ニ異ナリ夫ノ如者ノ職業時間ヲ制限スル事ノ如キ以テ見ルヘシ故ニ雇主ト父母トノ約束ヲ以テ如者ヲ工場ニ役セシムルニ當リ父母ハ雇銀ノ多キヲ貪リ雇主ハ使用時間ノ長キヲ利シ而シテ児童脆弱ノ^癖ヲ役スル常度ニ過キシムルモ如者自ラ其身ニ巨害アルヲ曉ラス其人ト爲ルニ及ビテ身軀枯^癖瘠竟ニ用ニ耐エサルニ至ル此ノ如キハ少年自衛ノ力無ク父母又之ヲ賊フモノニシテ政府ヲ除クノ外能ク之ヲ防ク者アル

ナシ是レ泰西文明ノ國ニ於テ如者勞役ノ時間ヲ制限スルヲ以テ社會ノ幸福ヲ保スル必要ノ法律トスル所以ナリ而シテ普通教育ノ責ヲ父母ニ課スルモ亦主義ヲ此理ニ拘クスルトキハ則チ決シテ之ヲ緩漫ニ付スヘカラサルナリ故ニ今回ノ改正案ニ於テハ已ムヲ得サルノ事故アルニアラサレハ児童ヲ就學セシメサル可カラサルノ義ヲ定メ且其最短期十六ヶ月ヲ改メテ三ヶ年トスルモノハ三年ノ時月ヲ費ヤシテ以テ小學最低ノ課程ヲ全ク修ムルヲ得ハ補其終身ヲ裨益スルニ及フヘキ力爲メナリ而シテ土地ノ事情職業ノ情態ニ隨ヒ三ヶ年連續シテ學ニ就ク能ハサルモノハ毎年時ニ隨テ就學シ

三ヶ年ノ課程ヲ卒ルニ至リテ始メテ其責ヲ免
 レシム其毎年十六週ヲ以テ限トスル亦偶然ニ
 アラサルナリ夫レ小學ノ開校ヲ毎年三十二週
 ト定ムルトキハ三ヶ年ニシテ九十六週ナリ學
 齡ハヶ年間毎年就學スルヲ十六週ナルトキハ
 通計一百二十八週ナリ是レ三ヶ年連續シテ以
 テ就學スル者ヨリ其時ヲ増スヲ三十二週即チ
 一年ノ開校期ヲ加フルニ同シ其之ヲ増加スル
 所以ノ者ハ夫ノ連續シテ以テ學フモノハ終始
 學問ノ念ヲ離レスト由モ毎年十六週間學フモ
 ノハ一年強半他ノ業ニ從事シテ學問ノ念殆ト
 断ス其念離レサル者ハ業夷ニ成リ易ク其念断
 ヌルモノハ遺忘ノ患免レ難シ故ニ通計一年ノ

開校期ニ當ルノ時ヲ加ヘテ以テ之ヲ補フノミ
 抑法律ハ其既ニ三年ノ課程ヲ卒フルモノニ於
 テ一切就學ヲ望マサルハキ手曰ク否サルナリ
 夫レ三年ニミテ業ヲ卒フルハ小學最低ノ課程
 ノミ豈之ヲ以テ足レリトスト謂ハニヤ故ニ既
 ニ之ヲ卒フル者ト雖モ生計餘アリ且職業ノ爲
 スヘキ無キモノハ之ヲシテ學齡間就學セシメ
 ニヨリ要ス然リト雖モ人ニ貧富アリ躰ニ強弱
 アリ又初ヨリ就學スル能ハサルアリ或ハ三年
 就學スル能ハサルアリ故ニ止ムヲ得サルノ事
 故アル者ハ全ク其責ヲ免セシメサル可ラス既
 ニ三年ノ業ヲ卒ヘテ特殊ノ學ヲ修メントスル
 モノアリ職業工藝ニ從事セントスル者アリ其

相當ノ理由アルハ學齡間普通學ニ就カサルモ
亦可ナリ而シテ之ヲ實施スルニ當リ如何ナル
モノカ是レ不得已ノ事故トスヘキ如何ナルモ
ノカ是レ相當ノ理由トナスヘキ其大綱ヲ豫定
スルヲ無ケレハ寬嚴人ニ因リテ異ニシテ法律
ノ精神ヲ破リ人民ノ苦害ト爲ルノ弊ナキヲ保
ツ能ハス是レ就學督促ノ規則ヲ要スル所以ニ
シテ府知事縣令之ヲ起草シ文部卿ノ認可ヲ經
セシムルハ其理由第十一條但書ノ說明ニ同シ
是レ兩條改正ノ要旨ナリ

第十六條 小學校ノ學期ハ三ヶ年以上八ヶ年以下
タルヘク授業日數ハ毎年三十二週以上タルヘ
シ

但授業時間ハ一日三時ヨリ少カラス六時ヨリ
多カラサルモノトス
理由 學期ト就學ノ期限トハ互ニ交渉シテ分
離スヘカラサルモノトス何トナレハ其比較相
協ハサレハ錯亂ミテ行フ可ラサレハナリ是レ
本條最短ノ學期四ヶ年ヲ改メテ三ヶ年トシ一
歲ノ授業四ヶ月以上ヲ改メテ三十二週以上
トナシ第十五條ト照應セシムル所以ナリ且現
行ノ令ニ於テハ一日ノ授業時間ニ制限ナキカ
故ニ機カニ一時間ニ滿メサルノ授業ヲ以テ法
律要スル所ノ開校日數ニ充ツルモノアリ是ノ如
キハ其名アツテ實ナキモノトス或ハ達成ノ功
ヲ貪リテ一日ハ時間餘ニ及フモノアリ是ノ如

キハ児童ノ心性醜質ニ適セス徒ラニ倦怠ノ生
セシメテ終ニ益ナキノミナラス却テ健康ヲ損
スルノ害アリ是レ本條ノ但書ニ於テ其制限ヲ
設ケタル所以ナリ

第十七條

學齡児童ヲ學校ニ入レス又巡回授業ニ
依ラスシテ別ニ普通教育ヲ授ケントスルモノハ
郡區長ノ認可ヲ經ヘシ

但郡區長ハ児童ノ學業ヲ其町村ノ小學校ニ於
テ試驗セシムルニ

墨書

理由 児童ヲシテ學校ニ入ラシメ若ノハ巡回
授業ニ就カシムル所以ノモノハ他ニアラス其
主眼唯普通教育ヲ受シタルニ故ニ此等ノ
手段ノ除クノ外別ニ普通教育ヲ受シムルノ途

墨書

アル例ハハ家庭ニ於テ児童ヲ教育スル者ノ如
キハ亦之ヲ許サハ之ヲ得ス然リト雖モ之ヲ以
テ口ニ藉キ以テ就學ノ責ヲ塞カントスルモノ
、如キ或ハ其無キヲ保ス可ラス是ノ如キハ則
テ豈至當ノ監制ヲ爲サハルヲ得ニヤ而シテ現
行ノ令ニハ此重ヲ缺ケリ是レ今回ノ改正ニ於
テ初ニハ郡區長ノ認可ヲ經セシメ又時々試驗
ヲ爲シテ以テ其効ヲ監スル所以ナリ

第十八條

小學校ノ設置スルノ資力ニ乏シクシテ
巡回授業ノ方法ヲ設ケ普通教育ヲ児童ニ授ケニ
トスル町村ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

理由 現行ノ令タル學校ヲ設置スルノ資力ニ
乏キ地方ニ於テハ教員巡回ノ方法ヲ設ケテ児

童ニ教授セシムルコトヲ得ベシト云フニ止マ
リ其巡回授業ヲ爲スヲ得ルニハ何等ノ手續ヲ
以テスヘキヲ説ス是レ町村ニ學校ヲ設置スル
ノ責ヲ負シムシルノ義ニ違フモノナリ何ント
ナレハ町村ノ人民學校ヲ設クルヲ悦ハサルモ
ノ我地方ハ學校ヲ立ルノ資カニ乏シト聲言シ
ロラ巡回授業ニ籍テ僅カニ一二ノ教員ニ數十
町村ノ児童ヲ托シ授業ノ實終ニ擧ラサルニ至
ルモ曾ラ巡回授業ニ一定ノ制度ナキ以上ハ官
又之ヲ如何トモスル能ハサレハナリ且ツ其學
校ヲ設置スルノ資カニ乏シキト否トハ町村自
ラ之ヲ判定スルヲ得ル乎地方官之ヲ判定スル
乎法律ニ於テ毫モ之ニ言及スルナシ抑亦不備

墨書

ノ文ト謂フヘシ是レ今四ノ改正ニ於テ府知事
縣令云々ノ句ヲ増加セル所以ニシテ地方ノ情
況ニヨリテ之ヲ設クルヲ得セシムルモ亦徒ラ
ニ之ヲロニ籍テ苟モ其責ヲ免ルハ者無ラ
シメント欲スルナリ

第二十條

公立學校幼稚園書籍館等ノ設置廢止其

府縣立ニ係ルモノハ文部卿ノ認可ヲ經ヘク其町
村立ニ係ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

理由 現行ノ令タル公立學校ノ設置廢止ハ府

知事縣令ノ認可ヲ經セシムルモノトス抑公立

學校トハ官立私立ノ中間ニ位スルニ種ノ學校

ヲ指テ云フモノナリ其府縣ニ於テ地方税其他

府知事縣令管スル所ノ費種ヲ以テ設立スルモ

ノ之ヲ府縣立ト云ヒ其町村人民ノ協カテ以テ
設立スルモノ之ヲ町村立ト云フ夫レ府縣立ニ
於テハ府知事縣令恰モ其校主タルノ位地ニ在
ルモノ、如シ而シテ現行ノ令ハ都テノ公立ヲ
概括シテ之ヲ府知事縣令ノ認可スルモノトセ
リ然ラハ則チ府縣立ニ於テハ府知事縣令自ラ
之ヲ設立シ自ラ之ヲ認可スヘシト謂フカ如キ
モノニシテ其理ニ協ハサル從テ辨スルニ足ラサ
ルト明是レ今回ノ改正ニ於テハ同一公立ノ名
稱中ニ就キテ彼此ヲ甄別シ其甲ハ之ヲシテ文
部卿ノ認可ヲ經セシメ乙ハ之ヲシテ府知事縣
令ノ認可ヲ經セシム此ノ如クニシテ後始メテ
倫次アリト謂フヘシ且單ニ學校ヲ舉テ其他教

育上須要ノ局部ニ及ハサルハ法律ノ不備ナル
ニ由リ今幼穉園書籍等ノ文字ヲ増加シテ以テ
其意ヲ補ヘリ

第二十一條 私立學校幼穉園書籍館等ノ設置ハ府
知事縣令ノ認可ヲ經ヘク其廢止ハ府知事縣令ニ
關申スヘシ

但公立小學校ニ代用スル私立小學校ノ廢止ハ
府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

墨書

理由 現行ノ令ニ於テハ私立學校ノ設立ヲ府
知事縣令ニ關申セシムルニ止マル是ニ由テ生
スルノ弊亦勘カラス夫レ學校ハ世間普通ノ營
業ト同カラス人ノ心性ヲ陶冶シ智徳ヲ左右ス
ルノ要具タリ故ニ其法宜キヲ得レハ俗ヲ化シ

智ヲ聞クノ益アリト雖其宜キヲ失ヘハ則チ
小ニシテハ人ヲ戕セ大ニシテハ俗ヲ壞ルノ害
アリ其レ然リ故ニ學術ナキノ人ハ師ト爲ス可
カラス素行修マラサル人ハ師ト爲ス可カラズ
然ルニ現行法ノ如ク學校ノ設立ヲ聞申ニ止ム
ルトキハ學術ナキノ人ニシテ此利器ヲ妄用ス
ルヲ得ルノミナラス刑餘ノ人ト雖モ亦執願師
位ニ居ルコトヲ得ントス夫レ人ノ身軀ヲ左右
スル者ハ醫師ナリ人ノ心性ヲ左右スル者ハ教
師ナリ其^此要點ニ至テハ公私ノ別ニ因^テ變セサ
ルモノナリ而シテ醫師ノ業ヲ營ムヤ官其性格
ヲ鑒ミ教師ノ校ヲ聞クヤ其自爲ニ任ス豈人ノ
心性ハ身軀ニ如カスト謂ハニヤ是レ今回ノ改

正ニ於テ其設立ヲ認可セシムル所以ナリ抑其
廢止ニ至テハ此ニ異ニシテ官此ニ關スルノ權
ナシトス何ントナレハ其設立ヤ將サニ爲スア
ラントスルモノニシテ事積極ニ屬ス是レ世ニ
益^セスト雖モ亦之ヲ害スルノカアリ是レ官ノ認
可ヲ要スル固ヨリナリト雖モ其廢止ヤ之ニ反
シテ將ニ爲スナカラントスルモノニシテ事消
極ニ屬ス是レ世ニ益セスト雖モ亦之ヲ害スル
ノカ無シトス政府ハ私人ノ害ヲ爲スヲ過ムル
ノ任アリト雖モ其レヲシテ益ヲ爲サシムルヲ
責ムルノ力無シ是レ其校主ノ意ニ放任セサル
可ラサル所以ナリ獨リ公立學校ニ代用スルノ
小學校ニ於テハ之レニ異ナリ其校アルカ爲メ

ニ公立小學校ヲ設クルノ責ヲ町村ニ免レシム
レハ則チ此私立タルヤ恰モ公立ト同一ノ權利
ヲ有セリ故ニ^{法律}健眼ノ之ヲ見ル公立ノモノニ同
カラサルヲ得ス況ニヤ此校ニシテ一旦廢止セ
ラルハニ於テハ其町村ノ児童直チニ就學ノ途
ヲ失フニ於テヤ故ニ之ヲ廢止セサルヲ得サ
ルノ場合ニ於テハ町村ヲシテ別ニ小學校ヲ設
シメサル可カラス則チ官ニ於テ^其廢止ヲ豫定ス
ルニ^ハ廢サレハ不可ナル所以ナリ是レ本條改正
ノ大旨ナリ

第二十二條 町村立私立學校如^レ稱圖書館等設置
廢止ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ
認可ヲ經ヘシ

墨書

第二十三條 小學校ノ教則ハ文部卿頒布スル所ノ
綱領ニ基キ府知事縣令土地ノ情況ヲ量リテ之ヲ
編制シ文部卿ノ認可ヲ經テ管内ニ施行スヘシ
但府知事縣令施行スル所ノ教則ニ準據シ難キ
場合アリテ之ヲ斟酌増減セントシ府知事縣令
之ヲ許可セントスルトキハ其意見ヲ付シテ文
部卿ノ認可ヲ經ヘシ
理由 現行ノ令タル公立學校ノ教則ハ文部卿
ノ認可ヲ經テ私立學校ノ教則ハ府知事縣令ニ關
申セシム此區別タル甚々謂レナキモノトス政
府ノ學校ニ於ケル單ニ公私ノ別ニ依テ監督ノ
途ヲ異ニスヘキニアラス必ス其教學ノ性質ニ
就テ之ヲ審スヘキ理義アルノミ何ソヤ夫ノ專

門工藝職業等ノ學校タル各其特殊ノ性質アリテ
 特殊ノ智術ヲ要スルヲ以テ官ノ利トスル所民
 ノ不利トスル所タルモ亦知ル可ラス民ノ見ル
 所官ノ監ル所ニ劣ルト謂フ可ラス語ニ所謂老
 農老圃ニ如カスト即チ此理ニ同ニ故ニ此類ノ
 モノニ於テハ必ス官其教則ノ細目ニ干渉シテ
 取裁スルヲ要セサルナリ獨リ小學校ニ至テハ
 是レニ異ナリ其人ヤ學齡兒童ニシテ其學ヤ普
 通教育ナリ其性質既ニ定マレリ其目的固ヨリ
 一ナリ其教則モ亦此性質ト此目的トニ合セサ
 ル可カラス若シ其私立ニ係ルノ故ヲ以テ此性
 質ニ協サルモ亦可ナリト謂ハシカ小學校ノ名稱
 何ニ因リラカ定マラン況ニヤ其公立私立ノ別

十ク小學ニ入ルトキハ則チ就學ノ責ヲ盡スモ
 ノト法律ノ之ヲ認ムルニ於テヤ故ニ今回ノ
 改正案ニ於テハ其小學ニ關スルノ條ハ公私ヲ
 問ハス法律眼悉ク同一ノ着ヲ做セリ此理ヲ推シ
 テ之ヲ察スルニ現行令ノ第二十二條第二十三
 ノ區別タル干渉スヘキニ干渉セス而シテ干渉
 スヘカラサルニ干渉スルモノニシテ大ニ其倫
 次ヲ失フモノタルヲ灼知スヘキナリ其小學校
 ニアラサル諸種學校ノ教則細目ハ官之ヲ取裁
 スルヲ要セサルノ理ハ既ニ之ヲ明カセリ然ラ
 ハ則チ全ク之ヲ放置スヘキ乎曰ク否其設立ヲ
 認可スルト否トハ畧一定ノ限界ナカル可カラ
 ス唯其學問ノ自由ヲ掣肘ス可カラサルノミ學

校設置ノ目的講學ノ要領教員ノ履歷學校維持ノ方法ノ如キ皆官ノ知ラサル可カラサルモノナリ其廢止ニ於ルモ亦其理由ヲ知ルニアラサレハ認可スルト否トノ標準ヲ立ツルニ由ナシ是レ其要領ヲ定ムルノ規則ヲ要スル所以ナリ其小學ニ於ル固ヨリ一定ノ主義ニ基ツクト雖モ全國ノ廣キ都鄙ノ隔タル其細目ニ至リテハ固ヨリ取捨セサル可カラス是レ文部卿之レカ細領ヲ定府知事縣令ヲミテ土地ノ情況ヲ量リ教則ヲ編制セシムル所以ナリ而シテ一地方中又之ヲ取捨セサル可カラサルニ於テハ更ニ斟酌増減ミテ以テ其事情ニ應スルヲ得セシム但其範圍ヲ超脱シ普通教育ノ大旨ニ違ハサランカ

紙張

第二十六條

公立學校ノ敷地ハ免稅タルヘシ

第三十三條

各府縣ハ小學校教員ヲ養成セシカ爲ニ師範學校ヲ設置スヘシ

墨書

理由 現行令ノ本條ニ於ケル各府縣ニ於テハ便宜ニ隨テ公立師範學校ヲ設置スヘシトアル既ニ便宜ト云フトキハ之ヲ設ケサルモ亦可ナルカ如シ夫レ小學ノ整否ハ教員ノ良否ニ關シ教員ノ良否ハ師範學校ノ整否ニ原セリ師範學校ノ小學ニ於ケルヤ必ス消長ヲ同クスル者ニシテ師範學校衰ヘテ小學校ノ獨リ盛ナルハ各國ノ實歴ニ徴ミテホタ之レアラサルナリ我國

太政大臣

通學ヲ督勵シテヨリ今ニ及ニテ各府縣師範學
校ノ設ナキ者アラスト雖ニ其年ヲ歴ル尚ホ淺
ク教員ニシテ師範學科ノ卒業シタル者ハ全國
ニ通シテ十中ノ一ニ過キス他ハ皆旧時ノ學ヲ
講シテ教授ノ術ヲ知ラサル者ナリ且偏境僻地
ニ至テハ實ニ良師ニ乏シキヲ以テ大抵僧侶修
驗習字師ノ徒カシク字ヲ識リ書ヲ讀ム者ノ幾
カニ其員ニ充ルノミ學事ノ振ハサル職トシテ
其一原因タラスニハアラス故ニ今ヨリ以來師
範生徒教養ニハ最モ力ヲ致サ、ル可カラス而
シテ小學ノ設ケ人民必爲ノ責タル以上ハ師範
學校ノ設ケ亦豈苟モ便宜ニ任スヘキモノナラ
ニヤ是レ則チ便宜云々ノ句ヲ削ル所以ニシテ

墨書

「小學教員ヲ養成セニカ爲」ノ句ヲ加フルハ其
目的ヲ明示セントスルニアルナリ
第三十八條 小學校教員ハ官立公立師範學校ノ卒
業證書ヲ有スルモノトス
但本文師範學校ノ卒業證書ヲ有セスト雖ニ府
知事縣令ヨリ教員免許狀ヲ得タルモノハ其府
縣ニ於テ教員タルモ妨ケナシ
理由 現行令ノ本條ニ於ケル單ニ師範學校云
々トアリテ其官公私ノ別ヲ言ハス是レ構成不
備ノ私立師範學校ヲ起シ簡易ノ學科ヲ教授シ
テ卒業證書ヲ與ヘ之ヲ受ルノ人ヲシテ教員タ
ルヲ得セシメントス或ハ曰ニ私立ト雖モ其
整備スル者ニ於テハ亦可ナラスヤト然リト雖

本收
頭典

是レ實際上必ス無キノ事ナリ師範學校ノ性
質タル之ヲ教ユル者因テ以テ利益ヲ占ムルノ
餘地ナシ公共ノ負擔スル所トナリテ初メテ維
持スルヲ得ル者トス故ニ私立ニ係ルモノハ必
ス其費用ヲ裁省シテ其構成不備タラサルヲ
得ス是レ私立師範學校ノ望ヲ屬ス可カラサル
所以ニシテ既ニ已ニ不備ナルヲ豫知スレハ豈之
ヲ以テ官公立ト同一視スルヲ得ヘケニヤ故ニ
今回ノ改正案ニ於テハ官立公立ノ四字ヲ加ヘ
タリ且銀行令ノ但書タル「教員ニ相應セル學力
アル云々」トアリ然ルニ其相應セルト判定スレ
ハ果シテ誰ノ職タルヲ詳ニセス故ニ之ヲ改
正シテ其義ヲ明ニセリ

朱ノ捺点ヲ除ク只
墨書ノニニテ宜シ

削除案

第二十八條 公立小學^校ヲ補助セシカ爲ニ文部卿ヨ
リ毎年補助金ヲ各府縣ニ配付スヘシ
第二十九條 府知事縣令ハ文部卿ヨリ領取セシ補
助金ヲ各公立小學校ニ配付スヘシ
第三十條 前年中授業四ヶ月ニ滿タサリシ小學校
ニハ補助金ヲ配付セサルヘシ
第三十一條 私立小學校タリト雖モ府知事縣令ニ
於テ其町村人民ノ公益タルコトヲ認ムルキハ補
助金ヲ配付スルコトヲ得ヘシ
第三十二條 教員巡回ノ方法ヲ以テ教授セシムル
コト一ヶ年四ヶ月以上ニ至ルノ町村ニハ補助金
ヲ配付スルコトヲ得ヘシ

公立師範學校ノ整備ヲ要セシカ爲ニ

文部卿ヨリ補助金ヲ各府縣ニ配付スルコトアル

ヘシ

墨書

理由 文部省ニ於テ普通教育ヲ奨励セシカ爲
メ是レマテ年々定額ノ中ニ就キテ各地方ニ補
助金ヲ配付セリ而シテ其額年々同一ナラス其
始メニ方リテ七拾萬圓ヲ出セシマリト雖モ
本省ノ定額減少セルニ隨ヒテ漸ク其數ヲ殺キ
十四年度ニ至リテハ定額更ニ減スルヲ以テ既
ニ補助金ヲ出スノ餘裕アルナシ蓋シ補助金
ノ配付タル普通教育ヲ必課スルノ制度ニ於テ
ハ相伴ヒテ必ス無カル可カラサルモノトス何
ントナレハ土地肥瘠ト人民ノ貧富トノ間ハス

児童ノ就學學校ノ設立ヲ督促スル以上ハ政府
モ亦其幾分ヲ支出シテ以テ其カヲ助ケ其志ヲ
勵マサハル可カラサレハナリ而シテ此補助金
タル出ス所ヨリシテ之ヲ見レハ巨額ナリト雖
モ各地方ノ學校ニ配付スルニ及ヒテハ一枚ノ
得ル所僅ニ五六圓ニ過キス然ラハ則チ之ヲ存
ルト廢スルト實際ニ於テ全ク影響ナキカ曰ク
否夫レ教育令ノ發行アリテヨリ政府ハ教育ヲ督促セシテ人
民ノ自爲ニ放任セリト誤解セルモノ鮮カラス則チ今回ノ改正
案タル大ニ此趨勢ヲ挽回セシカ爲メ一層督促ヲ
嚴ニセルカ故ニ曾從來ノ補助金ヲ廢ス可カラ
サルノミナラス更ニ幾分ヲ増加シテ以テ此精
神ヲ助ケサルヲ得サル者ノ如シ然リト雖モ從

來ノ配付ハ實際ニ益スルノカ甚タ乏キヲ以テ
更ニ此金額ヲ轉用シ獎勵ノ方法ヲ變更セサル
可カラス然ルニ事之ニ及シ一方ニ於テハ督促
ヲ嚴ニシ一方ニ於テハ單ニ補助金ヲ廢ス故ニ
今回改正案ヲ行ハント欲スルニ方リ此一事ニ
至リテハ實ニ遺憾ナキ能ハサルナリ然リト雖
既ニ之カ餘裕アル無レハ則チ之ヲ廢セサル
ヲ得ス故ニ是等數條ノ刪除ハ固ヨリ其望ム所
ニアラス則チ已ムヲ得サルニ出ツルノミ但別
ニ督勵法ノ考案アリト雖ニ事施政ノ努メニ屬
シ是等數條刪除ノ理由ニ關セサルヲ以テ敢テ
此ニ贅セス

追加案

墨書

第四十八條 町村立學校ノ教員ハ學務委員ノ申請
ニ因リ府知事縣令之ヲ任免スヘシ
第四十九條 町村立小學校教員ノ俸額ハ府知事縣
令之ヲ規定シラ文部卿ニ開申スヘシ
第五十條 品行不正ナルモノハ教員タルコトヲ
得ス
理由 教育ノ目的ヲ達スルト否トハ實ニ教員
其人ヲ得ルト否トニ係リ教育其人ヲ得ルト否
トハ其待遇ノ厚キト否トニ由ル學制ノ精神迄
緩ミテヨリ人民漸ク教育ヲ輕視シ教員ノ學業
居心如何ヲ問ハス唯給料ノ寡キト其人ト爲リ
ノ^判判^判易キトヲ是レ視ルノミ夫レ重賞ノ下ニ
能者出テ功名ノ門ニ材者集マル令ヤ教員タル

者ノ利益ナリ又勞位ナシ此ノ如クニシテ技能
ノ士ヲ得テ教員タラシメントスルハ尚ホ本ニ
縁テ魚ヲ求ムルカ如キナリ故ニ有爲ノ人ハ教
員トナルヲ屑トセス其一時教員ト爲ル者モ胸
中自ラ平カナル能ハス幾許ナラスシテ去テ他
ニ之ヲ其猶々トシテ職ヲ守ル者ハ人看テ事ニ
勝ヘサルモノ、如クス是ニ於テカ教員ノ位地
日ニ低下ニ趣キ學事漸ク荒ミ學校ノ信用日ニ
衰フ其弊亦極マルト謂フヘキナリ是レ此等ノ
三條ヲ追加スル所以ニシテ其府知事縣令ヲシ
テ此ヲ任免セシムルハ其職ヲ重スルニ在テ其
俸額ヲ規定セシムルハ妄ニ其給料ヲ減少セサ
ラシムルナリ而シテ教員ノ職任重ク給料モ亦

其職ニ應スル以上ハ隨テ之ヲ責ルモ亦嚴ナラ
サル可ラス是レ品行正シカラサルモノヲシテ
教員ノ名ヲ冒カサシムルハ法律ニ於テ禁スル
ヲ明示スル所以ナリ

第五十一條 各府縣ハ土地ノ情況ニ隨ヒ中學校ヲ
設置シ又專門學校職工學校等ヲ設置スヘシ

理由 各府縣大低中學校等ノ設ケアラサルハ
ナシ而シテ府縣會起リテヨリ往々之ヲ無用視
シ動モスレハ廢止セントスルニ傾クノ勢アリ
公平ノ眼光ヲ放ツテ之ヲ觀ルニ地方ノ中學校
等現時悉ク整備シテ又議スヘキモノナシト謂
フヘカラスト雖ヒ之ヲ改良スルヲ勉メス中
道ニシテ廢止スルハ特ニ學事ノ退歩ヲ促スノ

ミナラス其土地人民ノ損失モ亦細ナラスト謂
フヘシ蓋シ各地方ニ於テ學齡兒童普通學科ヲ
卒業スルノ後更ニ高等ノ學科ヲ修メント欲ス
ル者アルモ若シ此等學校ノ設置アラサルトモ
ハ更ニ進ニテ高上ノ學ニ就クノ道ナク已ムヲ
得ス遠ノ爰ヲ貢フテ都下ニ遊ントスレハ旧地
ニ在テ學フニ比スルニ其費耗スル所ハ往々之
ニ倍セントス況ヤ既ニ設立セル學校ニシテ俄
然トシテ之ヲ廢止スレハ曩ニ注入セル所ノ資
本ハ一朝徒費ニ歸シテ止マントスルニ於テヲ
ヤ是レ今回本條ヲ設ケテ豫メ其損害ヲ未然ニ
杜カント欲スル所以ナリ然リト雖モ今日ニ當
リ其未タ中學ノ設ケナキ地方ニ向テ強エテ之

ヲ課セサル可カラサルモノトスルニハアラス
是レ即チ土地ノ情況ニ隨ヒ云々ト注意ノ言ア
ル所以ナリ

内務部議案 十三年十月九日

別紙文部省上申教育令改正之儀ハ上申ノ通御裁可
相成可然候尤モ現行教育令第二十六條ニ「公立學校
ノ土地ハ免稅タルヘシトアリ學校ニ屬スルノ土地
ハ皆ニ免稅タルモノ、如ク其免稅スヘキ土地ノ區
分明瞭ナラス候間之ヲ敷地ト改候方可然且同省上
申ノ缺裁ニヨルトキハ新舊錯雜官民ノ不便少ナカ
ラス因テ各條ヲ整理シ別紙之通布告相成可然哉仰
高裁候也
(別紙)
布告案

第号

明治十二年^九日第四拾号布告教育令左ノ通改正候條
此旨布告候事

明治十三年月日

第一條 全國ノ教育事務ハ文部卿之ヲ統攝ス故ニ
學校幼稚園書籍館等ハ公立私立ノ別ナク皆文部
卿ノ監督内ニアルヘシ

第二條 學校ハ小學校中學校大學校師範學校專門
學校職工學校其他各種ノ學校トス

第三條 小學校ハ普通ノ教育ヲ児童ニ授クル所ニ
シテ其學科ヲ讀書習字算術地理歴史^史修身等ノ初
歩トス土地ノ情况ニ隨ヒテ昇^昇畫唱歌體操^操等ヲ加
ヘ又物理生理博物等ノ大意ヲ加フ殊ニ女子ノ爲ニハ

裁縫等ノ科ヲ設クヘシ

但已ムヲ得サル場合ニ於テ讀書習字算術地理
歴史^史修身ノ中地理歴史^史ヲ減スルコトヲ得

第四條 中學校ハ高等ナル普通學科ヲ授クル所ト
ス

第五條 大學校ハ法學理學醫學文學等ノ專門諸科ヲ授
クル所トス

第六條 師範學校ハ教員ヲ養成スル所トス

第七條 專門學校ハ專門一科ノ學術ヲ授クル所ト
ス

第八條 職工學校ハ諸般ノ工藝ヲ授クル所トス
以上數條掲クル所何ノ學校ヲ論セス各人皆之ヲ
設置スルコトヲ得ヘシ

第九條 各町村ハ府知事縣令ノ指示ニ從ヒ獨立或ハ聯合シテ其學齡兒童ノ教育スルニ足ルヘキ一箇若クハ數箇ノ小學校ヲ設置スヘシ

但本文小學校ニ代ルヘキ私立小學校アリテ府知事縣令ノ認可ヲ經タルキハ別ニ設置セサルモ妨テナシ

第十條 各町村ハ學務ヲ幹理セシメシカ爲ニ小學校ヲ設置スル獨立或ハ聯合ノ區域ニ學務委員ヲ置キ戶長ヲ以テ其員ニ加フヘシ

但人員ノ多寡給料ノ有無及其額ハ區町村會之ヲ評決シ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第十一條 學務委員ハ町村人民其定員ノ二倍若クハ三倍ヲ薦舉シ府知事縣令其中ニ就テ之ヲ選任

スヘシ

但薦舉ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第十二條 學務委員ハ府知事縣令ノ監督ニ屬シ兒童ノ就學學校ニ設置保護等ノ事ヲ掌ルヘシ

第十三條 凡兒童六年ヨリ十四年ニ至ルハケ年ヲ以テ學齡トス

第十四條 學齡兒童ノ就學セシムルハ父母後見人等ノ責任タルヘシ

第十五條 父母後見人等ハ其學齡兒童ノ小學校ニケ年ノ課程ヲ卒テサル間已ムヲ得サル事故アルニアラサレハサクトモ毎年十六週以上就學セシメサルヘカラス又小學校ニケ年ノ課程ヲ卒ル

タル後ト雖モ相當ノ理由アルニアラサレハ毎年
就學セシメサルヘカラス

但就學督責ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ
文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第十六條 小學校ノ學期ハ三ヶ年以上八ヶ年以下
タルヘク授業日數ハ毎年三十二週日以上タルヘ
シ

但授業時間ハ一日三時ヨリ少カラス六時ヨリ
多カラサルモノトス

第十七條 學齡兒童ヲ學校ニ入レス又巡回授業ニ
依ラスミテ別ニ普通教育ヲ授ケントスルモノハ
郡區長ノ認可ヲ經ヘシ

但郡區長ハ兒童ノ學業ヲ其町村ノ小學校ニ於

テ試驗セシムヘシ

第十八條 小學校ヲ設置スルノ資力ニ乏シクミテ
巡回授業ノ方法ヲ設テ普通教育ヲ兒童ニ授ケン
トスル町村ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第十九條 學校ニ公立私立ノ別アリ地方稅若クハ
町村ノ公費ヲ以テ設置セルモノヲ公立學校トシ
一人若クハ數人ノ私費ヲ以テ設置セルモノヲ私
立學校トス

第二十條 公立學校幼稚園書籍館等ノ設置廢止其
府縣立ニ係ルモノハ文部卿ノ認可ヲ經ヘク其町
村立ニ係ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第二十一條 私立學校幼稚園書籍館等ノ設置ハ府
知事縣令ノ認可ヲ經ヘク其廢止ハ府知事縣令ニ

開申スヘシ

但公立小學校ニ代用スル私立小學校ノ廢止ハ
府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第二十二條 町村立私立學校幼稚園書籍館等設置
廢止ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ
認可ヲ經ヘシ

第二十三條 小學校ノ教則ハ文部卿頒布スル所ノ
綱領ニ基キ府知事縣令土地ノ情況ヲ量リテ之ヲ
編制シ文部卿ノ認可ヲ經テ管内ニ施行スヘシ
但府知事縣令施行スル所ノ教則ニ準據シ難キ
場合アリテ之ヲ斟酌増減セントシ府知事縣令
之ヲ許可セントスルキハ其意見ヲ附シテ文部
卿ノ認可ヲ經ヘシ

第二十四條 公立學校ノ費用府縣會ノ議定ニ係レ
ルモノハ地方税ヨリ支辨シ町村人民ノ協議ニ係
レルモノハ町村費ヨリ支辨スヘシ

第二十五條 町村費ヲ以テ設置保護スル學校ニ於
テ補助ヲ地方税ニ要スルトキハ府縣會ノ議定ヲ
經テ之ヲ施行スルコトヲ得ヘシ

第二十六條 公立學校ノ敷地ハ免税タルヘシ
第二十七條 凡學事ニ供スル寄附金等ハ其寄附人
ヨリ指定セシ目途ノ外ニ支消スルコトヲ得ス

第二十八條 公立小學校ヲ補助センカ爲ニ文部卿
ヨリ毎年補助金ヲ各府縣ニ配付スヘシ
第二十九條 府知事縣令ハ文部卿ヨリ領取セシ補
助金ヲ各公立小學校ニ配付スヘシ

朱ノ棒点ヲ除ク

第三十條

前年中授業四箇月ニ滿タサリシ小學校ニハ補助金ヲ配付セサルヘシ

第三十一條

私立小學校タリト雖モ府知事縣令ニ於テ其町村人民ノ公益タルコトヲ認ムルトキハ補助金ヲ配付スルコトヲ得ヘシ

第三十二條

教員巡回ノ方法ヲ以テ教授セシムルコト一箇年四箇月以上ニ至ルノ町村ニハ補助金ヲ配付スルコトヲ得ヘシ

第三十三條

各府縣ハ小學校教員ヲ養成セシカ爲ニ師範學校ヲ設置スヘシ

第三十四條

公立師範學校ニ於テハ本校卒業ノ生徒ニ試験ノ後卒業證書ヲ與フヘシ

第三十五條

公立師範學校ハ本校ニ入學セサルモ

朱ノ捺点ヲ除ク

ノト雖モ卒業證書ヲ請フモノアラハ其學業試験ニ合格ノモノニハ卒業證書ヲ與フヘシ

第三十六條

公立師範學校ノ整備ヲ要センカ爲ニ文部卿ヨリ補助金ヲ各府縣ニ配付スルコトアルヘシ

第三十七條

教員ハ男女ノ別ナク年齡十八年以上タルヘシ

第三十八條

小學校教員ハ官立公立師範學校ノ卒業證書ヲ有スルモノトス

第三十九條

但本支師範學校ノ卒業證書ヲ有セスト雖モ府知事縣令ヨリ教員免許狀ヲ得タルモノハ其府縣ニ於テ教員タルモ妨ナシ

第四十條

文部卿ハ時々吏員ヲ府縣ニ發遣シ學

事ノ實況ヲ巡視セシムヘシ

第四十條 公立學校ニ於テハ文部卿ヨリ發遣セ
ル吏員ノ巡視ヲ拒ムコトヲ得ス

第四十一條 府知事縣令ハ管内學事ノ實狀ヲ記載
シテ毎年文部卿ニ申報スヘシ

第四十二條 凡學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスル
コトヲ得ス

但小學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルモ妨
ナシ

第四十三條 凡學校ニ於テ授業料ヲ收ムルト收メ
サルトハ其便宜ニ任スヘシ

第四十四條 凡兒童ハ種痘或ハ天然痘ヲ歴タルモ
ノニ非サレハ入學スルコトヲ得ス

第四十五條 傳染病ニ罹ルモノハ學校ニ出入スル
コトヲ得ス

第四十六條 凡學校ニ於テハ生徒ニ體罰ヲ與ヘ
ルヲ加フヘカラス

第四十七條 生徒試験ノトキハ父母或ハ後見人等
其學校ニ來觀スルコトヲ得ヘシ

第四十八條 町村立學校ノ教員ハ學務委員ノ申請
ニ因リ府知事縣令之ヲ任免スヘシ

第四十九條 町村立小學校教員ノ俸額ハ府知事縣
令之ヲ規定シテ文部卿ニ開申スヘシ

第五十條 品行不正ナルモノハ教員タルヲ得
ス

第五十一條 各府縣ハ土地ノ情況ニ隨ヒ中學校ノ

設置シ又専門學校職工學校等ヲ設置スヘシ

元老院へ達 十三年十二月十八日

教育令改正布告案

右其院議定ニ被附候事

二月十八日

元老院へ達 十三年十二月十八日

文部權大書記官嶋田三郎

文部少書記官久保田讓

右教育令改正布告案議定ノ節内閣委員トシテ被差

遣候條此旨相達候事 十三年十二月十八日同日

島田三郎久保田讓ヨリ内閣書記官へ照會 十三年十二月十八日

過日文部卿ヨリ上奏相成候教育令改正案御裁定ノ

上本日元老院議定ニ被附候由就テハ内閣ニ於テ御

取捨相成候際等有之候ハ、其箇所爲心得御回示置

相成候様致度此段及御依頼候也 十三年十二月十八日

内閣書記官回答 十三年十二月二十日

今般元老院ノ議定ニ付セラレ候教育令改正案ノ儀

ニ付御照會ノ趣致承知候右ハ都テ文部卿稟申ノ通

御裁定相成候儀ニ有之候尤現行第二十六條「公立學

校ノ土地ハ免稅タルヘシト有之學校ニ屬スルノ土

地ハ都テ免稅タルモ、如ク相見區分明瞭ナラス

候間「公立學校ノ敷地ハ免稅タルヘシト改メ併セテ

議定ニ被付候此旨及御答候也 十三年十二月二十日

追テ御稟申ノ体裁ニテ布告相成候テハ官民ノ

不便不少ニ付別紙ノ体裁ニ被改現行據置ノ各條

ヲモ差加ヘ順次整理シ議定ニ被付候得共今般議

定可相成條々ハ都テ改正ノ各條ニ限り候儀ト御

心得可有之此旨申添候也

明治十二年^{九月}第四十号布告教育令左ノ通改正候條

此旨布告候事

第一條 、 、 、 、

第二條 、 、 、 、

第三條 、 、 、 、

元老院上申 十三年十二月二十四日

本月十八日議定ニ被附候教育令改正布告案昨廿三

日會議ニ於テ修正ヲ加フヘキニ決シ別冊修正案

勅裁ヲ仰キ候爲メ御上奏有之度候右ハ修正セシ

以ノ理由ヲ具シテ上奏可致答ニ候得共至急ヲ要ス

ルノ際時日ヲ費サンコトヲ恐レ豫テ内閣委員^{文部省大書記官}

官嶋田三郎^{文部省大書記官}久保田讓^{文部省大書記官}ヘ致照會置候ニ付御質問ノ應

モ候ハ、同委員ヘ御打合有之度此般副テ申進候也

二月廿四日

同院上奏 十三年十二月二十四日

本月十八日下付セラレシ所ノ教育令改正布告案昨

廿三日會議ニ於テ別冊ノ如ク修正ヲ加フヘキニ決ス因テ

其修正ノ餘項ヲ藍書シテ謹テ之ヲ上奏ス

第二條^{別冊}學校ハ小學校中學校大學校師範學校專門^{農學校}

學校^{職工學校}其他各種ノ學校トス

第八條

藍点ハ除ク朱書ノミ、
藍書ハ墨ニテ並ノ行
並ノ字形ニ書入ルヘシ

以上數條掲クル所何ノ學校ヲ論セス各人皆之ヲ
設置スルコトヲ得ヘシ

第三十七條 教員ハ男女ノ別ナク年齡十八年以上

藍書堂ニテ並ノ行ハ
並ノ字ニ書キ入ル
藍点ハスヘテ除ク

九政類集

タルヘシ

但品行不正ナルモハ教員タルコトヲ得ヌ

第四十九條

町村立小學校教員ノ俸額ハ府知事縣

令之ヲ規定シテ文部卿ニ開申スヘシ

第五十條

品行不正ナルモハ教員タルコトヲ得

第五十一條

各府縣ハ土地ノ情況ニ隨ヒ中學校ヲ

設置シ又專門學校

農學校職業學校

工學校等ヲ設置スヘシ

内務部議按

十三年十二月二十四日

別紙大部署上申教育令改正布告案本月十八日元老

院ノ議定ニ付セラレ候處別紙ノ通修正ノ上議決ノ

趣上申相成則ニ審案候處標當ノ修正ニシテ不都合

ノ虞無之相考候間御裁可相成可然哉仰高裁候也

年十二月廿四日

元老院へ達

十三年十二月二十八日

本月二十四日其院議定上奏相成候教育令改正案第

三條中讀書習字算術地理歴史修身云々ヲ讀書習字

算術地理歴史云々ニ改メ別紙ノ通便宜布告ノ後其

院檢視ニ被付候事

二月廿八日

同院上申

十三年十二月二十四日

去ル十三年十二月廿八日下付有之候教育令改正案

第三條中改正ノ儀布告今廿四日檢視ヲ經過ニ本案

致奉還候條御上奏有之度候也

一月廿四日

同院上奏

十三年十二月二十四日

去ル十三年十二月廿八日本院ノ檢視ニ付セラレシ

所ノ教育令改正案第三條中改正ノ儀布告今廿四日

檢視ヲ經過ス仍ラ本案ヲ奉還シテ謹テ之ヲ上奏ス

九月廿四日

十三年十二月二十日

陸軍省へ達

十三年十二月二十日

別紙文部省伺音響ノ速度測定ノ爲メ号砲連發ノ儀聞
届候條此旨相達候事

文部省伺

十三年十一月十九日

東京大學理學部教授等音響ノ速度測定ノ爲天氣稍
變換ナキ日ヲ選ミ午前若クハ午後ニ於テ毎日正午
ノ号砲ニ用井ル大砲ノ連發ヲ請求致度旨申出元來
右速度ヲ確定スルハ理學上緊要ノ事件タルハ勿論
人事ニ於テモ最要ノ關係アルヲ以テ泰西ノ諸國ニ
於テモ是迄往々斯ニ從事セル者アリ然ルニ東京ニ
於テハ幸正午号砲ノ設アリテ此事ヲ行フニ極メテ
便利ナルヲ以テ曩ニ東京大學理學部ト本郷全學部